伏見城跡発掘調査現地説明会資料

2007 年 11 月 10 日（土）

調査地：京都市伏見区桃山福島大夫西町１ － ２番地

調査期間：2007 年９月 25 日～ 11 月 22 日（予定）

調査面積：約 570㎡

調査主体：財団法人　京都市埋蔵文化財研究所（http://www.kyoto-arc.or.jp/）

はじめに

調査地は伏見城の城下に展開した大名屋敷の一角で、常陸（ひたち）54 万石佐竹義宣（さたけよしのぶ）邸と考えられています。伏見城は、慶長（けいちょう）２年（1597）に木幡山（こわたやま）を中心に豊臣秀吉によって築城され、城下の西側を中心に武家や商工業者が集住する城下町が形成されました。しかし、慶長５年（1600）の関ヶ原戦の前哨戦で主要な建物は焼失してしまいます。その後、徳川家康による再建が始まり、慶長８年（1603）には征夷（せいい）大将軍の宣下をこの城で受けました。元和（げんな）元年（1615）の大坂夏の陣以後は城郭としての役目を終え、元和９年（1623）の徳川家光の三代将軍宣下後に廃城となりました。

遺　構

今回見つかった遺構は、調査区西側の道路（大和街道（やまとかいどう））に沿った石組の側溝（そっこう）と柵列、屋敷地内の整地土層、建物に伴う石垣基礎、底部に礎石を持つ土坑、埋土に焼土を含む柵列、その他に礎石や柵列などがあります。

整地土層は西北に下がる斜面を平坦にするために整地されたもので、最も厚い所で 0.7 mに達します。遺構はこの層の上面で見つかりました。

石組側溝は径 0.3 m前後の石材を組んだもので、内法で幅 0.7 m、深さ 0.3 mあります。

柵列は柱穴の径 0.4 mの円形で、柱間は 1.7 mあります。

石垣基礎は径 0.6 m前後の石材を並べたもので、南西角と南東角が認められます。東西７m、南北 12 m以上の長方形の平面が復元できます。

礎石土坑３と４は長径 2.1 m、短径 1.2 m、深さ 1.7 mの瓢形で底部に礎石が据えられており、２基が対になるとみられます。同じく土坑１と２は径 1.2 m、深さ 0.6 mの方形しています。

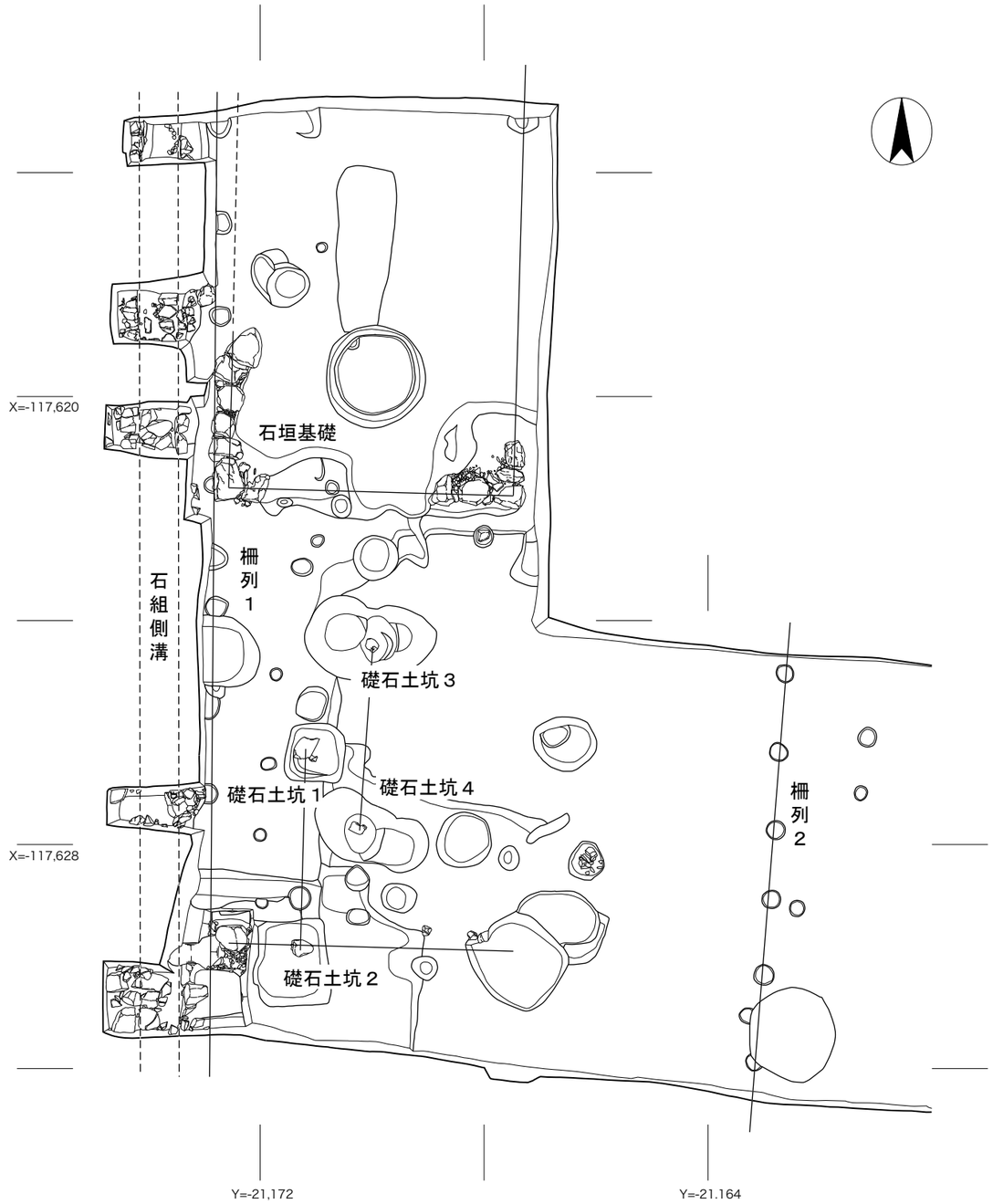
遺　物

出土した遺物は、桃山時代から江戸時代前期の土師器皿・塩壺（しおつぼ）、陶器（皿・椀）、磁器（皿・椀）、瓦類などがあります。瓦類には、佐竹氏の家紋である「五本骨扇に月丸」文の軒丸瓦が多く見つかりました。

まとめ

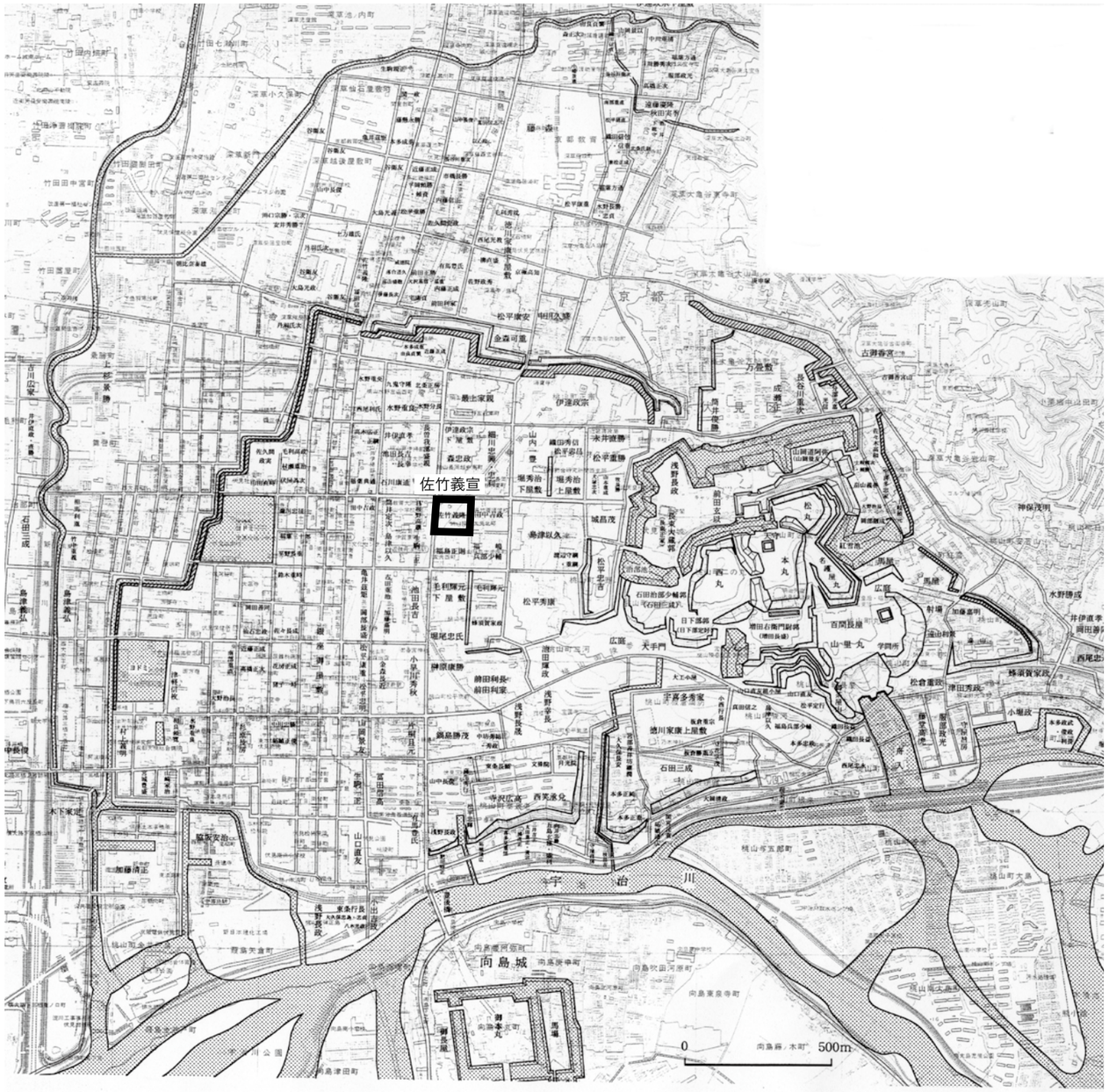
石組側溝と柵列（柵列１）は伏見城築城に先立つ区画整理時に構築されたもので、主要道路に沿って設置されたとみられます。整地土層、石垣基礎、礎石土坑などは敷地配分後に整備され、敷地内の柵列・土坑は、焼土を含むことから関ヶ原戦後の整理や復興後の遺構と捉えることができます。

敷地内で見つかった石垣基礎や一対となる礎石土坑は大和街道に面した門とそれに伴う遺構の可能性があります。



平面実測図（1：100）

0　5m



第3・4期伏見城（豊臣期～徳川期木幡山城）城下町
推定復元図

日本史研究会「豊臣秀吉と京都　-聚楽第・御土居と伏見城-」より
発行　図書出版　文理閣

調査区南西部写真（北東より）

石組溝（北より）